

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成26年6月4日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2011～2013

課題番号：23520110

研究課題名（和文）ユダヤ教における「預言者」vs「祭司」のパラダイム

研究課題名（英文）Prophets vs. Priests Paradigm in the Judaism

研究代表者：

勝又 悦子（KATSUMATA, Etsuko）

同志社大学・神学部・助教

研究者番号：60399045

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）4,000,000円、（間接経費）1,200,000円

研究成果の概要（和文）：

本研究は、19世紀末近代ドイツに成立したユダヤ学に「祭司」と「預言者」を対立させるパラダイムがあり、その根幹には「預言者」偏重主義が近現代思想にあったのではないかという問題意識の下、ユダヤ教文献中での「預言者」「祭司」についての言説を収集し分析し、ユダヤ学的なとらえ方と実態の違いを比べた。研究の結果、第一に、ラビ・ユダヤ教文献では、預言への関心は副次的なものであり、彼らの主眼は祭司的な事柄にあることが統計的に示された。ラビたち自身は、祭司の後者として自己認識している。第二に、13世紀以降中世時代のユダヤ思想の中で預言的なものへの価値が高まっていることが窺える。ユダヤ学が彼らの基盤としたラビ・ユダヤ教をとらえる視点は必ずしも実態をとらえているとは言えないことが示された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to analyze the Priests vs. Prophets paradigm in Judaism, and to examine the problem of the prophetic-biased perspective in the Wissenschaft des Judentums (WJ). The research came to these following conclusions. The first was that Rabbinic literature did not show a great deal of interest in the prophets and prophecy, rather focused on the priests and the priesthood. They seem to have identified themselves as proper successors of the priests in the Bible. The second finding was that prophets and prophecies are referred to much more frequently in the later Midrash anthologies completed in the 13th century; this lead to the conclusion that prophetic matters were more popular in later ages. These findings show that the prophetic-biased view pioneered by WJ did not reflect the diversity and creativity of Judaism.

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：宗教学

キーワード：ユダヤ学、ユダヤ教、ラビ・ユダヤ教文献、祭司、預言者

1. 研究開始当初の背景

19世紀末ドイツで成立したドイツ・ユダヤ学(以下WJ)は、紀元後70年のエルサレム第二神殿崩壊後、それまでのユダヤ教の政治的、宗教的中心であった神殿祭儀を占有する祭司層による祭司的宗教から、聖書の師であるラビたちが指導するラビ・ユダヤ教に転換したと考えてきた。特定のエリート家系が主導権を握るエリート宗教から、

トーラーを学ぶ者、誰にも開かれた民主的な宗教への転換という図式は、当時のWJのユダヤ教の理想像の投影でもあった。

事実、WJの創生者であるツンツの著作には、聖書解釈を預言者伝統の再生とみなす記述が再三再四見られる。またガイガーは、祭司的伝統をエリート主義として徹底批判してそれを乗り越えたファリサイ主義

者によって、民主的なユダヤ教が再生したと考えた。また世代を経て、ベック研究所を成立させ、WJの発展に寄与したレオ・ベックも、ユダヤ教の真髄を、預言者にあると説く。WJには総じて、祭司主義的伝統を軽視し、ラビ的ユダヤ教を評価したが、特にそれがラビと預言者を重ね合わせていたことが伺える。

そして、このような預言偏重主義はWJに限らず、これまでのユダヤ教・ユダヤ思想史の中で、エリート的、儀礼的、祭司的宗教に対して、哲学的、思弁的、より崇高で反権力的な「預言者」「預言」的のものをよしとする傾向があったのではないかと考えられる。

さらに、他の2つの一神教においても同様の「預言」への偏重がみられる。原始キリスト教において、預言はイエスに集約される。つまりキリスト教においても、預言の体现者であり継承者であることは、彼らの正当性の根拠である。WJのユダヤ学論者の主張は、同時代のキリスト教神学の主張とも重なる。ヴェルハウゼンの聖書成立論以降、キリスト教伝統では、律法的内容よりも先んじて成立した預言書部分こそ旧約聖書の本質であると見なされてきた。イスラームにおいては、ムハンマドが最後の正当なる預言者である。つまり、ヘブライ語聖書を端緒とする一神教において、預言の取り合い現象がみられるのである。

しかしながら、実際に、ユダヤ教、特に今のユダヤ教のベースとなるラビ・ユダヤ教において、彼らの文献に即して、果たしてラビ自身がどの程度、預言、預言者に言及していたかを、統合的に分析した研究はない。更に、近年、ユダヤ学では、第二神殿崩壊以降の「祭司」の社会、経済、政治的影響力、彼らの伝統の再評価が盛んになされている。現在のユダヤ学の根底を築くWJのバイアスを明白にしながら、ラビ・ユダヤ教が依拠していたものを探ることが求められている。

2. 研究の目的

上記のこれまでの思想史上の系譜を背景として、本研究では、ユダヤ教伝統・ユダヤ思想の中に、「預言者」と「祭司」を対立させ、「預言」的なものに価値を置く預言ちゅう中心主義的な思考法があることを、ラビ・ユダヤ教文献、中世ユダヤ思想、近代

代のユダヤ思想家の思想に至るまでユダヤ教の原典テキストを縦横断して立証することを目的とした。そして、「預言」中心主義的傾向が看過してきた祭司的な伝統の存在とその意義を明らかにし、同時に、キリスト教、イスラームという他の二つの一神教・西洋近代思想においても同じような「預言」中心的な動向があることを副次的に明らかにする。そして、近代思想を反省的に分析する一つの枠組みとして「預言者」vs「祭司」のパラダイムの有効性を提示することを目的とした。

特に、ラビ・ユダヤ教時代の文献を主眼として扱い、WJが彼らの理想とした「民主的ユダヤ教」という見取り図が、果たして実態に即していたのかについて問うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、原典に基づいて、祭司・預言者についての言及箇所を収集し、データとして保存、それらをもとに分析し、研究成果の発表という手順をとった。研究の分野は主として以下の4部門にわたった。

(1)ラビ・ユダヤ教時代の様々なジャンルの文献から、「祭司」「預言者」についての記述を集め、統計的に分析した。「祭司」「預言」のそれぞれの語根の派生語が表れる言説が何例みられるのか、Bar Ilan Responsa Project ver.20のデータ・ベースをもとに分析した。そして、ジャンルごとに、まだ時代別に「祭司」「預言」の言説数にどのような変移がみられるかを検証した。

(2)中世の代表的な思想家、聖書注解者(サ阿德・ガオン、マイモニデス、ナハモニデス)らの思想、レスポンス文学、神秘主義文献「バヒールの書」「ゾーハル」からも、「祭司」「預言者」に関係ある資料を収集し、中世時代の「祭司」「預言者」構図を明らかにする。

(3)上記のテキストを註解したドイツ啓蒙主義、ドイツ・ユダヤ学創世期のユダヤ思想家の著作を読み進め、そこに見られる「祭司」「預言者」対立図式を明らかにする。特に、ドイツ・ユダヤ学の牽引者であったL. Zunz, A. Geiger, 次世代の旗手L. Beackらの著作を中心に分析する。

(4)キリスト教、イスラームでの「祭司」「預言者」像を明らかにする。

4. 研究成果

(1)近代ドイツのユダヤ学の牽引者、L. Zunzの著作を通して、Zunzがラビたちを「預言者」の後継者とみなしている言説を抽出した。またもう一方のA. Geiger、次世代のL. Beackらが「祭司」の存在に沈黙、あるいは無意識

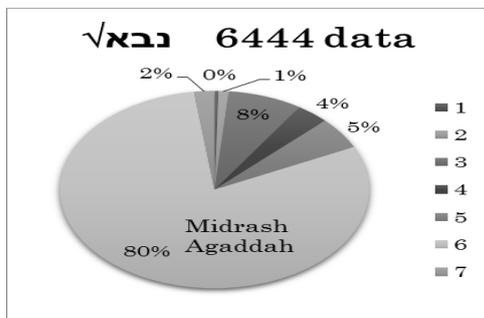
であることを指摘した。

(2) WJ が分析の対象とし、また彼らの理想としたラビ・ユダヤ教文献では、「預言者」「預言」の言及よりも「祭司」にかかわる言及が圧倒的に多いことを数量的に確認した(表1)。また、預言に関する言説が登場するのは、大部分が、ミドラシュ・アガダーと呼ばれるジャンルであり(図1)、法的ジャンルではほとんど言及されない。しかし、ラビ・ユダヤ教での最初の関心は、法的分野にあったことを看過してはならない。また、ミドラシュに・アガダーにおいても特に、預言が言及されるのは、13世紀以降のミドラシュ・アンソロジーである。つまり、総じて中世以降に、預言への関心が高まったことが窺える。

表1 ラビ・ユダヤ教文献ジャンル別「預言」と「祭司」の言及数

	נבואה 預言の語根	כהן 祭司の語根
1. Mishnah	27	695
2. Tosefta	68	844
3. Babylonian Talmud	501	3605
4. Palestinan Talmud	221	1567
5. Midrash Halacha	335	1353
6. Midrash Agaddah	5155	7400
7. Minor Tracts	137	159
Sum	6444	15623

図1 「預言」のジャンル別言及割合
1～6は、表1に対応



(3) ラビ・ユダヤ教の中でも、ジャンルによっては、祭司の扱い方が異なる。アラム語訳聖書での「祭司」「預言者」像についてデータ収集を進めた。この過程で、通常ヘブライ語聖書では「預言者」とみなされるエリヤが、タルグム偽ナタンでは頻繁に「祭司」という称号が与えられている。更に、タルグム偽ヨナタンでは、エリヤに対する祭司の呼称は、メシア的機能と重ねられていることが観察された。通常、ラビ・ユダヤ教文献の一環としてのみ評価されるタルグム文学には、ラビ・ユダヤ教文献とは一線を画する特徴があ

ること、ラビ・ユダヤ教時代の文学の多様性が明らかにされた。

(4) 祭司の活動の場である「神殿」が崩壊した事件(A.D.70年)が、初期ラビ・ユダヤ教文献で(A.D.200年成立『ミシュナ』を中心に)いかに記述されているかを探った。すると、ユダヤ文学では、今や確定された術語となっている「神殿崩壊」Hurban Bait という用語は、『ミシュナ』や同ジャンルの分野では定着していないことが判明した。そこでは、あたかも神殿祭儀がいまも行われているかの如く、神殿祭儀についての具体的で生き生きとした描写が中心であった。更に時代が経過して500年頃の成立のミドラシュになって初めて、それまで、語られることのなかった神殿「崩壊」が語られるようになる様子が窺える。この時点において、初めて、神殿崩壊に代わる価値としての「トラーの学び」シナゴグの意義が重ねられていく。これより、二つのことが類推される。一つには、何かの崩壊の危機に際して、その在りし日の様子を記録することの重要性である。その詳細な記録が、のちに思想的に文学的な発展の萌芽となるのではないだろうか。第二に、このような言説においても、ラビたちは、預言者の役割等を介して、神殿と自分たちをつなぐのではなく、直接、神殿と自分たちを結んでいるということである。ラビたちは、やはり預言の継承者としてではなく、神殿・祭司の継承者として自己認識していることが想定された。

以上の研究成果より、ユダヤ教を通してラビたちの関心は預言よりも、祭司にかかわる事柄にあることが理解された。また、ラビ・ユダヤ教文献では、否定的な意味での関心が高く、タルグム文学ではメシア像と祭司像を重ねる傾向がうかがわれた。中世以降の思想家において、預言についての関心が高くなる傾向がうかがわれる。しかしながら、総じて、近現代のWJにおいては、ユダヤ教における祭司への関心に沈黙、あるいは看過していることが理解される。元来、ユダヤ教には祭司的な事柄への関心が高かったことを認識することは、ユダヤ教本来のあり方を見直すことになるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

1 勝又悦子「ユダヤ教における『唯一の神』の意義—『シエマア・イスラエル』を通して」『福音と世界』2014年3月号、21—26頁。

2 勝又悦子「タルグム偽ヨナタン(Ps. J.)におけるエリヤ像」、『基督教研究』75 巻、2013 年 6 月、17-38 頁。

3 勝又悦子「偶像を打破するアブラハム—第二神殿時代文学・ラビ・ユダヤ教文献・クアーンでの解釈の変遷」『一神教学際研究』8 号、2013 年 3 月、38-62 頁。

4 勝又悦子、「文献比較の道標」、『CIMSOR ユダヤ学会議』4 号、2011 年、91-95 頁。

〔学会発表〕(計 4 件)

1 勝又悦子、「ユダヤ教の子ども観」の変遷、第 72 回日本宗教学会学術大会 2013 年 9 月、国学院大学。

2 KATSUMATA Etsuko, Images of Priests and Prophets in the Rabbinic Age and Wissenschaft des Judentums: 16th World Congress of Jewish Studies, 2013, July, The Hebrew University of Jerusalem, Israel.

3 勝又悦子、「第二神殿崩壊」はいかに解釈されたか、第 71 回日本宗教学会学術大会、2012 年 9 月、皇學館大學。

4 勝又悦子、ユダヤ教における「預言者」と「祭司」のパラダイム: 第 70 回日本宗教学会学術大会、2011 年 9 月、関西学院大学。

〔図書〕(計 2 件)

1 勝又悦子「ラビ・ユダヤ教は『神殿崩壊』をどのように捉えたのか」『世界の宗教といかに向き合うか—月本昭男先生退職記念献呈論文集』(第 1 巻) 市川裕編、2014 年 4 月、139-157 頁。

2 KATSUMATA, Etsuko
Priests and Priesthood in the Aramaic Targums to the Pentateuch, 2012, Lambert

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

講演

「ユダヤ教：神と人と律法と」
第 2 回ナザレ研修会、2013 年 11 月 2 日、横浜聖アンデレ教会。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝又悦子 (KATSUMATA, ETSUKO)
同志社大学神学部助教
研究者番号：60399045

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：